

対談

8・17 戦後79年特別企画

クリスティン・パイパー × 川村一之

731部隊を語る



■731部隊の母体となった防疫研究室に身を置いた医師の数奇な運命を描いた作品『暗闇の後で』でオーストラリア文学賞を受賞したクリスティン・パイパー。

■新宿区の人骨問題に取り組み「満洲事変」から731部隊が細菌戦を開始するまでを著書『七三一部隊 1931-1940』にまとめた元新宿区議の川村一之。

■クリスティンと川村が対談し、731部隊を語りつくす。



『暗闇の後で』翻訳者の北條正司・高知大学名誉教授の話も 通訳は片桐朋子さん

日時: 2024年8月17日(土) 13:30~16:00 (開場13:15)

会場: 武蔵野商工会館(4階ゼロワンホール)

東京都武蔵野市吉祥寺本町1-10-7 TEL 0422-22-3631

JR中央線吉祥寺駅下車 北口 徒歩5分

参加費: 500円

当日先着80名

主催団体: 「むさしの科学と戦争研究会」・「軍医学校跡地で発見された人骨問題を究明する会」・731ネットワーク

連絡先080-6602-2913(鳥居)

Eメール jinkotsu731@yahoo.co.jp





暗闇の後で 豪州ラブデー収容所の日本人医師

クリスティン・パイパー 著 北條 正司 訳

四六・336ページ 2,750円 2023/08/ 花伝社

誰にも話せない「暗闇」が、私の運命を翻弄した

731部隊と繋がる防疫研究室で石井四郎の部下として働いた医師、茨木智和。最高機密の下で目の当たりにした数々の事実により、彼は愛する人を失い、人生は流転を始める。

たどり着いた地・オーストラリアで開戦を境に“敵”となった彼は、強制収容所での日々を通じ、どう「暗闇」と向き合ったのか——

日豪にルーツを持つ作家が描く、戦時下のエリート医師の苦悩と決意

(あらすじ) 東京帝国大学医学部出身の俊英・茨木智和は、陸軍軍医学校に開設された新たな研究部門の門を叩く。そこは、忠誠心と思慮分別が何より求められる科学発展の最前線だった。防疫研究室での機密下での仕事は、次第に彼の精神を蝕み、その苦悩を知る由もない妻との関係は、崩壊に向かって進んでいく。すべてを失った茨木がたどり着いたのは、西豪州ブルームの「真珠ダイバー」たちのためにつくられた日本人病院の医師の椅子だった。誰にも明かせない「暗闇」を抱えたまま、なんとか現実と折り合いをつけて生きる茨木の元に届いた真珠湾攻撃の報せは、彼を敵性外国人として収容所に送り込む。そこで直面した様々な人間模様は、茨木の現在、過去、そして未来を変えていった——

2023年4月29日(土) 図書新聞

浮かび上がる七三一部隊の実像

文学作品・証言・地図を駆使し、細部に宿る本質に迫る

末永恵子

川村一之 著

▶七三一部隊 1931-1940

「細菌戦」への道程

12・27刊 A5判248頁 本体3600円

不二出版



七三一部隊の全貌は見えない。その要因は、戦争犯罪の責任追及から逃れるために組織的な隠蔽工作が行われたことにある。すなわち、部隊撤退に行われた証人隠蔽、捕虜全員の抹殺、部隊建物の破壊、公文書等の焼却——、部隊員への滅口令、そして人体実験データ提供による戦犯免責という米国の裏取引である。これらは、後世の歴史的検証をはばむ障害にほかならない。

しかし、こうした逆境にもかかわらず、七三一部隊の研究は、専門の研究者に限らず、小説家、ジャーナリスト、一般市民によって取り組まれてきた。彼ら彼女たちは、広く国内外の史料を探索して発掘し、沈黙していた部隊員から聞き取り調査を重ねることで研究を進めているのである。

川村一之著「七三一部隊 1931-1940」は、そうした七三一部隊研究をさらに進める著作である。細密な調査と膨大な文献群をふまえ、部隊の龍巻から大規模な細菌戦実施に至るまでの空白を埋める取り組みの成果である。本書の特長は多々あるが、私は三点を強調したい。第一

う。著者は、脱走者を情報源とする文献によって、部隊内の様子、逃匿時の状況、脱走の首謀者の名前などを明らかにしたうえで、脱走者たちが逃げ込んだ農村新築地を訪問し、現地の人々から村に伝承された逸話を聞き取った。また、首謀者の名前が刻まれた墓が二〇一七年になって発見され、状況証拠としての物証も現れた。こうした文献と証言と物証を組み合わせたことにより、脱走事件が厚みをもった史実として確定されているのである。

第二に文学作品に描かれた内容から事実を浮かび上げさせる手法についてである。本書は、加藤秀造「黒死病」、山田清三郎「明けない夜はこない」、宮本百合子「道標」、吉村昭「暁と爆弾」といった七三一部隊や石井四郎を題材とする文学作品を扱っている。著者は「作品は真実が表現されている場合もあれば、脚色されている場合もある。それを見極めるのは至難のわざである」と述べており、小説における虚構・事実との境界を判別するのの難しさを意識しつつ、文学作品を他の史料と照合し、符合する箇所を通して事実を迫ろうとしている。

第三に、部隊が存在し活動した場所を念入りに提示している点である。著者は当時の地図・鉄道路線図・写真および自作の地図を用いてその場所の位置関係を可視化させることにより、部隊のあった青森河・南宮、逃匿者が逃げ込んだ農村新築地、バスター橋の農安および新築地の場所をイメージ豊かに描いている。さらに、こうした場所に関する著者の徹底的探究は、重要な事実の特定につながる幸運にも恵まれる。著者は、「日本憲兵正史」にあった「石井四郎は戦前四平街にたづねられ……」という短文に遭遇するが、事実確認と読み飛ばしを繰り返すうちにこの箇所について看過せず調べ上げた。その結果、四平街の場所として石井部隊ではなく、陸軍科学研究所の安達部隊の実験場——化学兵器の効力試験のために非人道的人体実験が行われた——があったことを逆に見つけたのである。

第三に、部隊の全貌解明に近道はない。私は本書のような細部にわたる地道な検証作業こそが研究を切り拓いてゆくべきである。(福島県立医科大学講師・日本近代史)